

## 中国の将来（57・11・6）

貝塚 茂樹（大14文丙）

私は大正十四年に三高を卒業しましたが、同期には西堀君を始め三好達治、丸山薫、桑原武夫君等がおり、その中で一番固い、世間から見ると余り面白くない学問をして来た様に思いますが京都市民の方々に三高生としての感謝の微衷をと云う気持ちでお話を申し上げたい。

私の専門は中国古代史ですが、歴史は現代の視点を欠く事が出来ないで現代史を勉強する必要がある訳です。一九四九年に中華人民共和国が誕生し、当時国交は無かったけれど、五十四年の建国五周年式典に招待され、安倍能成団長等と共に私は昭和十一年以来久し振りに中国を訪れ、国慶節の行事に参加し新しい中国を見、毛沢東、周恩来、朱徳、劉小奇などの主な方々にも会う事が出来たのは一生で最も大きな出来事でありました。

私等が始めに感じたのは中国は変わったと云う事であった。昭和三年の訪中以来戦前の中国はかなりよく知っている心算であったので、如何様に変変わったか興味を持って眺めたのである。第

一に人民解放軍（八路軍）の軍紀の厳肅な事は聞き及んではいたが、聞きしに勝るものであった。パレードの翌朝街の中で戦車部隊が民宿していた。兵士が市民と親し気に話しているのを見かけた。中国のことわざに好鉄は釘にならずとあり、まともな人間は兵隊にならず、屑の人間だけがなると云われ、彼等は戦争するよりもその機会に人民から掠奪するのを役得と心得ていた。人民の方もゲジゲジ虫の様に嫌がって滅多に交渉を持たなかったのであるが、八路軍は例えば民宿の時は食事代を払い、整理整頓は励行する等軍紀の厳肅さに驚いた。更にまた毛沢東、周恩来以下の政治家にも会ったが、誠に立派な人達で、明治維新創業の人達を想起させる高潔で新国家建設の意欲に溢れ、私心のない政治家達であるのに驚いたのである。

その後年が経つとともに、権力の座に長く坐った人達が変質して来た為か、六十六年に有名な文化大革命が勃発して、一体中国は、共産党は何処へ行くのかと疑問を感じた。ソ連の技術と方式で社会主義化を進めようとしていたのであるが、同じ社会主義と云ってもソ連のマルクスレーニン主義と毛沢東理論とはかなり離れており、西洋起源の社会主義が中国人民にどの様に受け入れられるか疑問を持っていたが、ここでは最近の中国を考えるのに一九七九年以後の今日の状態に限定してお話申し上げる。

中国は社会主義国で統制が厳格で内部の事情がよく判らず、秘密の部分が多いと一般に考えられているが、最近は外国に対して割合に開かれた国であって内部の変化もすぐ文書が公表される。

中国の新聞雑誌を少し注意深く読むと、日本の新聞を読んで日本の政治が裏面の詳細は判らぬとしても大筋は判ると同様にある程度はわかる様になってくる。

今の鄧政権になってマルクスレーニン主義には拘らずに経済を建設しようという時に文化大革命を継承して来た人々の象徴、たとえば葉剣英氏を追放せず元の地位に留めておくのは弱体政権の故かという見解もあるが、中国は年寄りを大切にす国であり、文化大革命が国民に不人気なのは共産主義革命を仕上げた元老達を迫害、追放した事が理由の一つでもある。仮令考え方が違っても害の無い限り置いておくのが中国の道徳観念と云ってもよい程である。中国は老人崇拜の国であり、年令秩序が非常に喧しい。葉氏は九十才ですがずっと副主席を続けると思う。新聞の様に葉氏を切れないのは文化革命からの脱却が完全に成功していないと云う見方は賛成し難い。

私も老先が短くなったので、現代史は絶縁して中国古代史の研究に専念したいと声明し、四年前に書物も整理したが、『北京週報』ぐらいは今も続けて読んでいる。この週刊紙は重要記録、文献を外国語に訳して週に一度出しており、この日本語版もある。

ところがこの週報の82年24号に『紅旗』に「共産主義の旗を降してはならない」という題の記事が出たのはショッキングであった。『紅旗』という共産党理論誌の論文であるが、元来この表題は逐語的に「われらの旗印は共産主義」であると訳すべきであったのでニュアンスがかなり違う

と思われる。私は中国の共産主義、社会主義は中国の中に根付いて行くのかについて少し疑問を持って来た。毛沢東の思想は国際的なマルクスレーニン主義の中に中国の伝統を取り入れた社会主義と云われるが、社会主義は西洋キリスト教社会に生れたものであって、元来儒教道徳によって支配されてきた中国の社会、人民の中にほんとうに入って行くのは可成り難しいのではないかと考えて来た。表題の訳はおかしいけれど内容的には中国人民の間で共産主義に対する不信感となり広くある事を背景にしている様にみえる。この様な大きな変化が起り始めたのは一九七九年頃らしい。

中国の十億の人口の八割は農民で、五万四千の人民公社に分かれており、公社は土地即ち生産手段である農地を共同所有し、私有は許さない。耕作するのも生産隊で共同耕作することが強制されている。この様な状況下で能率よく生産を高められるか、ソ連のコルホーズも非能率で、農業問題は社会主義のネックと云われており、中国では十億という圧倒的な人口と、その八割を占めるという農民一人当たりの可耕地が日本よりずっと少ない事から見れば問題は深刻である。

中国では漢代に既に人口調査が行われ、漢書地理志に県別に合計すると戸数一千二百二十三万三千六十二戸人口五千九百五十九万四千九百七十八人と書かれ農地の面積も記載されているが、世界史に他に例のない事である。ローマ帝国の人口の記録は残っていない。中世に至っては全く不明。西洋では漸くここ二百年位の資料があるだけだ。中国の漢代では人頭税が主であって人口

を正確に把握する必要があった為であるが、広大な版図に対して容易な事ではない。王朝の勃興期には精度がよく、唐では開元、大宝までは可成りよいが以後戦乱の世になると精密度が悪くなる。漢代官僚の能率は歴代王朝の模範と云うべきものであった。

一九七九年に有沢廣己訪中団のとき、国勢調査について種々相談があり、しつかりした準備を整えてから実施すべき事を伝えたが、今回非常に複雑な項目に亘って人口調査が行われた。また文盲も多い中国では大変な努力を要した事と思われるが、新しい経済政策を立案するに当たってはどうしても人口を把握しなければならない。大変な作業を完遂したと云う事は中華人民共和国の努力、指導者、官僚の熱意は大したもので敬服に値する。

その結果、五十四、五年頃は六億と推定されていた人口が二十年の間に一・五倍に増加し、もともと大きな人口がまた大きくなって、食糧生産を確保する事は至上命令となった。

百姓の仕事はやはり土地、作物に愛情を抱いていなければ生産が上らぬ様で、それには一所懸命に働けば収穫の一部を農民に還元する様にしなければ生産意欲が湧かないだろうという事で、生産請負制と云うべき考を取入れ、一九七九年に生産大隊ごとに15%位は自留地としてどう使ってもよい、生産物は市場で売ってもよい、大規模に収穫を上げれば更に特別に報奨を与えるとした。

これは革命的な出来事である。農村の中でよく働き、よい土地を持っていて自由に売出せる作

物が出来、報奨を取る者が出て来ると、農民の間に貧富の懸隔が出ると予想されるが事実そうな  
って来た。日本の新聞記者の中には中国は社会主義でなくなったと書く者も出て来た。

中国ではその危険を冒しても、一粒でも食糧の生産を確保する必要に迫られているのであって、  
人民公社が完全に消えた訳ではない。人民公社の土地の集団所有性はあくまで人民公社にあると  
されてはいるが、耕作して出来た物が自由に処分出来るシステムでは、これは共產主義を根底か  
ら揺りかねないものである。実際はどうなっているかはよくは判らないがともかく中国共産党は  
やり度い事では無かったと思うが危険を覚悟して一九七九年に大改革を行った。北京週報によれ  
ば請負制と云うのは色々形態があるが、土地所有権は共同であつて絶対に個人の自由にはならぬ  
と云う原則の下に、生産して上げた利益の処理に或る巾を認める、しかしそのやり方は様々で中  
国は広いから地方によつて相当な違いがあると云われている。中国では現在何よりも先ず食糧の  
確保を第一としてしているのである。ソ連に比べてずっと少ない農地で生産を上げるには各農民の生  
産意欲を高めるため、こうするより仕方が無いと決断したのであろう。人口の抑制についても七  
九年以来乗出し、子供一人だけなら養育教育の特権があるが、二人、三人になると次第に負担が  
重くなる仕組みを取入れた。都会では効果が上がったかも知れないが農村では実効を挙げるこ  
とはなかなか困難だと云っている。党の官僚も人口の制限が難しい事は知っているが、やらなけれ  
ばならぬからやっている。イデオロギーより何より十億の人民をどうして食わせるかが至上命令

であるからだ。

中国の将来を考えて一番マイナス要因は人口の多い事であって、それに見合う農業生産を確保する難問題を抱えている。党の幹部は困難さを隠しめせず認めたと上で、正面から将来について真剣に取組んでいる点は我国の政治家などに比べるとズツと立派である。

私の恩師の小島祐馬先生は土佐の人で剛毅な性格の方でした。京大法学部を卒業後中国に二年滞在し、中国の現実の生活を体験し、それをさらに学問的に理解するため帰国後文学部の支那哲学に入学し中国政治思想史を本格的に始められたのである。北京に居た中江兆民の令息中江丑吉氏とも親しく交際され、左翼の連中ともつきあっておられたので危うく投獄の憂目に会いかけた事もあった。非常に進歩的でマルクス主義に理解の深い人でした。河上肇先生の最も信頼した人で、先生に護衛、尾行が付いた時期にも平気で河上邸に出入されたので、河上先生から深い信頼をえていられた。そこで弟子たちを厳しく批判した河上先生の回顧録の中で、小島先生だけは一言も悪く云われていないのです。

小島先生は中国革命が成功したとき『中国共産党史』という小冊子を出されましたが、その中で、これから先の中国共産党の前途は容易ではない。中国の農民はソ連の農奴制に由来する農民とは異なり、強制には服従しても心服はしない。心の中で批判している。何千年の歴史に育てられた感覚がある。——今日云ってみれば中華人民共和国の工合の悪い事は四九年建国以来三十年以

上になるが、その間絶えず路線変更をしている。日本だったらああ仕方ないと云って附いて行くかも知れないが、中国は附いては行くけれども度々変えられたらとても堪らんと云う事を口に出すか否かは別として、チャンと思ってる。——そう云う点がソ連とは全然違う。農奴制が続いたソ連で生まれたソ連型の農民と、小作制度から変化して来た中国では農民に無政府主義的なところが有り役人をかなり自由に批判する。そう云う農民にソ連で育った社会主義が果たしてうまく適用できるかどうか疑問である。

第二に中国の知識階級、学者は官吏になればその王朝の臣となり、皇帝のために働くけれども、君に対して忠を尽くすという皇帝や王朝に対する忠誠心は薄い。

とくに限度をこえた悪政にたいしては、正面から抵抗するものこそ少数であるけれども、心中でこれを批判し、服従することはない。日本の君臣関係とは違うので、ソ連共産党流の統制政策で果たしてこの連中を追従さす事が出来るか問題であると指摘しておられる。

中国共産党の革命が成功した時点で、小島先生は社会主義体制の行方に疑問を持っておられた。私も先生の感化を受けて、中国共産主義体制の前途にかなり疑念を持っていた。

革命の成功した時点で、人口の圧力とか、集団制農業生産の非効率とか云う大問題を多くかかえ持っていることは事実であるけれどもそれに対して政治家のなかには、亡くなった周恩来や、今の鄧小平のようにこの難問を正面から受止めて、社会主義を近代化しようと、その対策をうち



立てようと努力する真剣な政治家、官僚、学者がかなりいる事は大変な救いである。このような人達が健在する限り、中国の将来は非常に困難ではあるけれども明るい希望がもてるのではないでしようか。

(京都大学名誉教授)